

## ■ 治承・寿永の乱（源平合戦）とは

治承四年（1180）に始まり、約十年間にわたり全国的に展開された戦乱。

平清盛を中心とする平氏一門の武断的独裁政治に対する旧貴族・寺院・地方武士など諸勢力の反撥をきっかけに勃発し、源頼朝の武力による戦乱の終熄に至るといった経過をたどったため、表面上は源平両氏の相剋、すなわち源氏・平氏という武家棟梁の覇権争いという形姿をとって進行した内乱であった。

## ■ 治承・寿永の乱（源平合戦）における屋島合戦までの流れ

- ・ 1177年6月 鹿ヶ谷の陰謀  
院の近臣らが平氏打倒をはかり失敗した
- ・ 1179年7月29日  
平清盛の子・平重盛の死後（1179年7月29日）、後白河院と清盛の関係はさらに悪化
- ・ 1179年11月  
治承三年の政変→平清盛は後白河院を幽閉、関白以下多くの貴族を処罰した
- ・ 1180年4月9日  
清盛に反発した以仁王（後白河院の第三皇子）が諸国源氏に打倒平氏を呼びかける
- ・ 1180年4月27日  
伊豆国の頼朝のもとに令旨が届く（伝えたのは叔父の源行家）
- ・ 1180年5月27日  
以仁王、敗死
- ・ 1180年6月2日  
朝廷・福原遷都
- ・ 1180年6月19日  
京都にいた三善康信から頼朝の元に「清盛が令旨を受け取った源氏を滅ぼそうとしている」という手紙が届く
- ・ 1180年8月17日  
伊豆守の目代、山木氏を襲撃し、初戦勝利をおさめる
- ・ 1180年8月24日  
石橋山合戦で大庭景親率いる平氏の軍勢に破れるも、生き延びて安房に逃れる
- ・ 1180年10月6日  
鎌倉入りを果たす

・ 1180年10月18日  
富士川の戦いで平維盛率いる平氏の軍勢が敗走

・ 1180年10月26日  
投降してきた大庭景親を処刑

＜＜同時期に木曾義仲も挙兵

・ 1180年11月  
朝廷、福原→京都へ

・ 1181年閏2月4日  
清盛死去

・ 1183年4月  
平氏が北陸へ軍勢を派遣

野木宮合戦、上総広常暗殺  
など（関東）

・ 1183年5月11日  
倶利伽羅峠の戦いで木曾義仲、平氏の軍勢を下す

頼朝が朝廷に政治交渉を行い、  
勲功第一となるも、身分は  
流人のままだった  
※義仲、行家は任官

・ 1183年7月  
義仲入京

・ 1183年9月19日  
後白河院、義仲軍を平氏追討のために山陽道に送る

このあたりで後白河院と頼朝  
が政治交渉を行い、  
**寿永二年宣旨**が出される

・ 1183年閏10月1日  
水島の戦いで義仲は大敗する

### ★寿永二年宣旨

- ・ 東海道・東山道の国衙領・荘園を京都朝廷に返還する
- ・ 年貢を納める責任を頼朝が負うかわりに、従わない者を処罰する権利を得る
- ・ 頼朝は配流前の官位である従五位下右兵衛権佐に叙せられた

・ 寿永二年宣旨（『百鍊抄』寿永二年十月十四日条）に基づき、頼朝は東国年貢の納入を実行すると称して義経らを上洛させる（『玉葉』寿永二年閏十月二十二日条）

・ これを知った義仲は軍勢を引き上げて京都に戻る

・ 1183年11月19日  
義仲は後白河院を幽閉し、  
院に頼朝追討の下文を発給させた

この間に平氏は体制を立て直し  
四国から福原にまで進出

・ 1184年1月15日  
義仲、征東大將軍に

・ 1184年1月20日  
頼朝は範頼も派兵し、義仲方を攻撃、義経軍が宇治川  
を突破し院の身柄を確保。義仲、近江国で戦死

・ 1184年1月26日  
後白河院は頼朝に平氏追討と三種の神器奪還を命じ、源氏の軍勢は二十九日に京都を出立（『玉葉』元暦元年二月二十三日条）

・ 1184年2月7日  
義経・範頼の軍勢、一ノ谷において平氏軍に圧勝する。敗走した平氏の軍勢は四国の屋島・下関の彦島に拠点をおく

※頼朝方は兵力では平氏方に及ばなかった

※頼朝が目下排除したかったのは義仲であり、平氏との共存は否定的ではなかった

※後白河院の強硬姿勢があり、追討軍は京都を発ったが、兵力を集めるためにやや時間をかけている

※対義仲の際に義経の元集った兵たちのなかには、旧平氏方の武士たちもいた

・ 1184年2月18日  
頼朝、義経に京都の警護を申しつけ、梶原景時と土肥実平を播磨・美作・備前・備中・備後に惣追捕使として派遣する→惣追捕使・現地の武士のまとめ役、軍事指揮官  
※のちに、伊賀国・大内惟義、紀伊国・豊島有経、伊勢国・大井実春など

・ 1184年2月25日  
頼朝は朝廷に対して「畿内近国在住の武士たちに、源氏 味方するように命令を出して欲しい。義経に追討させる。手柄を立てた者への褒美のとりまとめは自分が行う」と要請

・ 1184年3月2日  
実平が西国に向かう。3月25日には国衙へ兵糧米の指図を行う

・ 1184年4月29日  
頼朝、6月の海上が穏やかな時に合戦したい旨、院に報告

・ 1184年6月  
播磨室泊が平氏方に襲撃され舟を焼かれる（『玉葉』）  
※さきの頼朝の命どおり進軍した結果戦闘が激化した  
※景時・実平の軍は、味方にした西国武士らを編成した軍である

鎌倉では一条忠頼（甲斐源氏）が殺害される

・ 1184年7月3日  
義経を平氏追討軍司令として西海に派遣すると院に伝える

・ 1184年7月7日  
伊勢国で平氏の蜂起がおこる  
※三日平氏の乱→この対応に義経が追われることになり、8月3日に伊勢に遣わす。  
8月6日に義経は後白河院から左衛門少尉・検非違使に任じられる

・ 1184年8月8日  
範頼を追討使として西海に遣わす

- 1184年9月1日  
範頼が京都から出立
- 1184年10月  
梶原景時／淡路に在陣？  
／石見国の有力武士益田兼高を味方につける  
範頼／安芸に進軍するも平氏方の妨害にあい兵站を絶たれる
- 1184年12月7日  
藤戸合戦（平氏方VS範頼軍）
- 1185年1月6日  
頼朝、範頼の手紙に返信  
※11月14日に範頼から送られた手紙  
＞東国から舟を送るようにする  
＞東国御家人とともに九州の武士を動員して四国にいる平氏を攻めるように。  
＞現地勢力との対立は避けるように。  
焦らず攻めるように
- 1185年1月8日  
義経の奏上があって、吉田経房が院に申す（『吉記』）
- 1185年1月10日  
義経、京都から出陣（『吉記』『百練抄』）
- 1185年1月12日（以前）  
九州渡航をあきらめ周防にとどまる
- 1185年1月26日  
豊後の臼杵兄弟から舟82艘を提供される。  
兵糧もゲット
- 1185年2月1日  
範頼の軍勢、豊後に渡る
- 1185年2月5日  
頼朝、京都へ御家人を派遣する  
（※義経の後任？）
- 1185年2月13日  
伊沢信光の手紙に四国で平氏と戦うよう指示
- 1185年2月13日  
頼朝義経を再起用、平氏を四国から攻める
- 1185年2月14日  
頼朝、四国決戦を指示
- 1185年2月16日  
義経、渡辺津から阿波へ
- 1185年2月17（18）日  
阿波へ到着、近藤六と合流
- 1185年2月19日 屋島合戦勃発
- 1185年2月22日  
景時率いる源氏の本体、屋島に到着  
／平氏は彦島に退く

## ■なぜ頼朝はすぐに平氏追討をおこなえなかったのか？

→水軍（舟）の保有数が足りなかった

※関東勢は水軍戦が不慣れだったのではなく、瀬戸内の潮流に対して解像度が低い  
ため、現地の戦力は必要であった

→兵糧・コストの問題

→西国武士の編成問題（とくに瀬戸内の武士は平氏方が多い）

※事前に調整しようと現地に入った土肥・梶原らの苦戦から現地戦力だけでは解決しないと踏んで関東からの増援（範頼軍）投入をしたが、  
兵糧に困ることになった

→頼朝自身が平氏追討には消極的でもあった

## ■義経の屋島出陣は頼朝の指示だったのか？

→義経の自尊であり、一部朝廷側の意向が含まれていたのではないかと

（例えば『吉記』の吉田経房は義経の出立を歓迎している）

## ■屋島合戦は源氏方の勝利なのだろうか？

- ・頼朝の意向は長期戦であり、短期決戦を望んだのは朝廷サイドではないか
- ・義経は寡兵で屋島を攻め、平氏を水上に一度撤退させることには成功しているが、時が経てば立つほど寡兵であるということは明確になり、そのままだったら平氏の軍勢に討たれていた可能性もおおいにあった  
（それを考えると、範頼方と連携はしていたと思うけど…？）
- ・頼朝が四国決戦を目論んでいたとすれば、四国から平氏の軍勢を彦島に逃してしまったことは失敗であった
- ・結局、壇ノ浦での海戦となり、結果的に安徳天皇は逝去し、三種の神器のうち草薙剣は見つからなかった

### 〈参考文献〉

宮田敬三『源平合戦と京都軍制』戎光祥出版

元木康雄『源義経』吉川弘文館

菱沼一憲『源義経の合戦と戦略—その伝説と実像—』角川選書

呉座勇一『頼朝と義時 武家政権の誕生』講談社現代新書

川合 康『源平合戦の虚像を剥ぐ 治承寿永の内乱史研究』講談社学術文庫  
『詳説 日本史 日本史探究』山川出版社